

地理歴史科（日本史 A） 学習指導案

日 時：平成 29 年 7 月 10 日（月） 2 校時

講 座：日本史 A（男子 12 名，女子 18 計 30 名）

場 所：プログラミング室（管理棟 3 F 東）

授業者：横峯 達也

教科書：『日本史 A 現代からの歴史』（東京書籍）

- 1 単元名 第 2 章 東アジア世界の変動と日本
4 節 日露戦争と帝国日本の形成

2 単元の目標

条約改正や日清・日露戦争前後の対外関係の変化，政党の役割と社会的な基盤に着目して，国際環境や政党政治の推移について考察させる。

3 単元の指導計画（4 節 日露戦争と帝国日本の形成 計 4 時間）

- (1) 日英同盟と日露戦争（1 時間）・・・本時
- (2) 韓国併合と東アジア（1 時間）
- (3) 産業革命と資本主義の発達（1 時間）
- (4) 桂園時代と社会問題（1 時間）

4 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
近代国家の形成と社会や文化の特色に対する関心と課題意識を高め，意欲的に追求している。	我が国の対外政策の推移と近代産業の成立から課題を見だし，条約改正や日清・日露戦争前後の欧米諸国やアジア近隣諸国との関係の変化と関連付けて多面的・多角的に考察・判断している。	近代の日本と世界を関連付ける資料から情報を読み取ったり図表などにまとめている。	近代国家の成立とその背景についての基本的な事柄を条約改正や日清・日露戦争とその前後の欧米諸国やアジア近隣諸国との関係と関連付けて理解し，その知識を身に付けている。

5 教材観

明治政府は，廃藩置県・封建的身分制度の廃止，学制や徴兵制，地租改正など一連の政治改革をして富国強兵・殖産興業を進め，西洋の近代思想や生活様式を取り入れた。その結果，日本は東アジアの新興国家として，国際社会で重要な地位を獲得していく。中学校までに学んだ基礎的・基本

的な知識を踏まえ、世界史・地理といった科目を横断して多面的・多角的に考察することが可能な単元である。日露戦争を日本だけでなく、世界史上の出来事として捉えることで、歴史を様々な視点から考えるきっかけとなるような授業としたい。

6 生徒の実態と指導観

本講座は、入学年次生 4 名、中間年次生 18 名、卒業年次生 8 名で構成されている。全体的には板書をノートに写し、教師の説明もよく聞く真面目な生徒が多い。しかしながら、その授業姿勢は受け身であることが多く、積極的な発言は普段あまりみられない。また資・史料の読み取り等、発展的な学習が可能な生徒がいる一方で、基本事項の習得や教科書の音読に困難を抱えている生徒もいるなど学力の差が大きい。そのため、授業の難易度や進度の設定に苦慮しているが、基礎的・基本的な知識の定着に重点を置きながら、多くの資料を提示し、簡潔かつ平易な説明を心がけることで歴史への関心を高め、歴史的思考力を育てていきたい。

7 【思考・判断・表現】評価の判断基準

(【思考・判断・表現】については、目標の達成状況を判断する基準を用いて評価を的確に行う)

判断の要素	
①ロシアの満州進出と日英同盟についてその背景と過程を、国際情勢と関連付けて説明している。	
②日露戦争前後で国際社会が日本を見る目がどのように変化したのかを説明している。	
尺度	判断基準
B	①中国に利権をもつイギリスはロシアの南下を警戒していたが、南アフリカで戦争を行っていたため、極東でのロシアの勢力拡大に日本の軍事力を利用しようとした。
	②日露戦争前ではアジアの小国だったが、戦争後は大国ロシアを倒したことにより、欧米列強は日本の勢力拡大を警戒している。
	(予想される生徒の表現例)
	①イギリスは世界各地の植民地支配や、そのための戦争を行っていたため、極東では日本の軍事力を利用しようとした。
	②日露戦争前ではアジアの小国だったが、戦争後はアジアの大国として見られるようになった。

学習状況の3段階

「十分満足できる状況」	A 状況
「おおむね満足できる状況」	B 状況
「努力を要する状況」	C 状況

※学習状況 C の生徒には、必要に応じて事前に準備した補足資料を提供しサポートする。

8 本時の実際

(1) 本時の目標

日清戦争後、列強と日本は中国に対してどのような動きを見せたか、中国分割から北清事変に至るまでの過程を理解させる。ロシアの満州進出と日英同盟についてその背景と過程を、国際情勢の中で考察させる。

日露戦争開戦をめぐって国内でどのような議論があったのかを理解させる。戦争の経過と講和条約の内容を理解し、日露戦争の結果が国内外にどのような影響を及ぼしたかを考察させる。

【思考・判断・表現】

(2) 本時の展開

過程	学習内容	○生徒の学習活動 ★指導上の留意点
導入 20分	<ul style="list-style-type: none"> ・ 出欠確認 ・ 前時の復習 <p>【学習課題の設定】 日露戦争前後で、日本を取り巻く国際関係はどのように変化したのか。</p>	<p>★時間厳守，挨拶の徹底。</p> <p>○生徒が事前に準備し，前時までの授業を振り返る（小テスト又は発表）。</p> <p>○本時の学習内容を確認し，記入する。</p> <p>★本時の学習内容の動機付けを明確に行う。</p>
展開 ① 25分	<ul style="list-style-type: none"> ・ 列強の中国分割 ・ 北清事変と日英同盟 	<p>○日清戦争後の中国の様子について，風刺画（『王様たちのケーキ』）を参考にして考え，発表する。</p> <p>★風刺画（『王様たちのケーキ』）を提示し，日清戦争後の中国はどのような状態になったかを読み取らせる。意見が出ない場合は，ヒントを出す。</p> <p>★日清戦争での敗北が，列強の中国進出を加速させたことを理解させる。その際アメリカは中国進出に出遅れたことにも着目させる。</p> <p>○義和団事件の背景と北清事変の内容を知る。（ワークシートに記入）</p> <p>★列強の中国分割により，中国の民衆の間に激しい攘夷的な感情が起こったことを理解させる。また風刺画（『列強クラブの新入り』）を提示し，日本が列強諸国に認められつつあることを理解させる。</p> <p>○日本政府内の意見対立について，ワークシート記入しながら確認する。</p> <p>★政府内には戦争回避を主張する慎重論もあり，開戦の直前までロシアとの交渉が続けられていたことを理解させる。</p>

		<p>○風刺画(『火中の栗』)の登場人物の吹き出しにセリフを入れるとともに、登場人物がそれぞれどこの国を表しているか考えて、発表する。</p> <p>★アメリカについては、セリフの推測が難しいので、ジョン=ヘイの門戸開放宣言をヒントにさせる。</p>
	イギリスはなぜ、日本と同盟を結んだのだろうか。(「光荣ある孤立」を放棄した理由)	
		<p>○イギリスが日本を支援する理由について※資料(『日露戦争前後の国際関係』)を参考に考えて、発表する。</p> <p style="text-align: right;">【思考・判断・表現】</p>
		<p>○日英同盟の条文を読み、内容を確認する。</p> <p>★条文を読み、ロシアとの戦争を想定した同盟であることを理解させる。</p>
展開 ② 30 分	<p>・主戦論・反戦論</p> <p>・日露戦争</p>	<p>○戦争をめぐる国内世論について資料(『内村鑑三の非戦論』・『七博士の満州問題意見書』)を読む。</p> <p>★日露戦争開戦をめぐる国内でどのような議論があったかを理解させる。</p> <p>○日露戦争の経過をワークシートに記入する。</p> <p>★戦費や戦死者を日清戦争時と比較し、大規模な戦いであったことを理解させる。</p> <p>○ポーツマス条約の内容をワークシートに記入する。</p> <p>★風刺画(日露を仲介するローズヴェルト)からアメリカの思惑を考察し、発表する。</p> <p>★ポーツマス条約の内容を確認させる。特に第1条と賠償金がないことに着目させ、国民の不満・負担増となったことを理解させる。</p>
ま と め 15 分	日露戦争の前後で国際社会が日本を見る目はどのように変化したのだろうか。	
	<p>・【学習課題の解決】</p> <p>日露戦争前ではアジアの小国だったが、戦争後は大国ロシアを倒したことにより、欧米列強は日本の勢力拡大を警戒するようになった。</p>	<p>○2枚の風刺画から日露戦争後、日本が欧米からどのように見られるようになったのかを考えて、発表する。【思考・判断・表現】</p> <p>★机間巡視し、生徒の理解度を確認する。</p> <p>○授業の振り返りをする。</p>

(3) 本時の評価

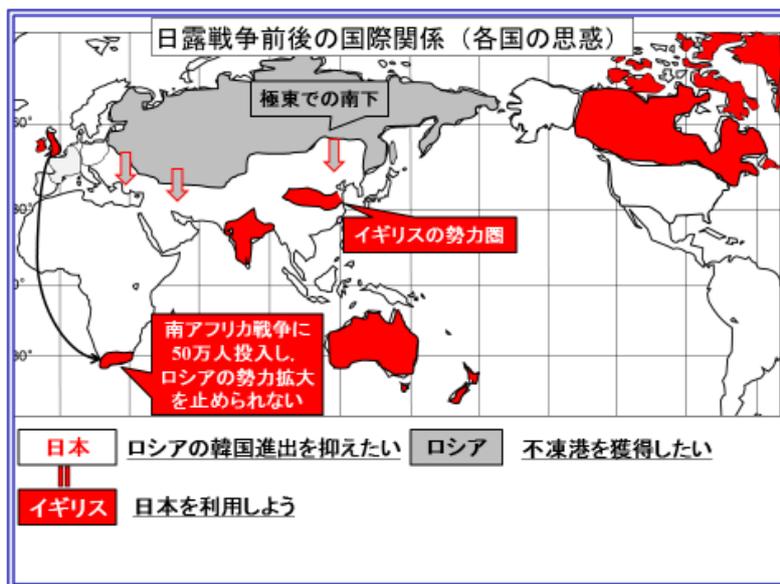
日清戦争後、列強と日本は中国に対してどのような動きを見せたか、中国分割から北清事変に至るまでの過程を理解させる。ロシアの満州進出と日英同盟についてその背景と過程を、国際情勢の中で考察し、その結果を適切に表現している。

日露戦争開戦をめぐって国内でどのような議論があったのかを理解させる。戦争の経過と講和条約の内容を理解し、日露戦争の結果が国内外にどのような影響を及ぼしたかを考察し、その結果を適切に表現している。

【思考・判断・表現】

※資料『日露戦争前後の国際関係（各国の思惑）』は生徒の理解に応じて2種類用意

1



2

